

# 一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム

## 組織ならびに活動内容のご説明

---

一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム 事務局

([info@chiikisousei.jp](mailto:info@chiikisousei.jp) , <http://chiikisousei.jp/>)

# 一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアムとは？

- 大阪富国生命ビル 一般社団法人テラプロジェクト・まちラボ発、  
**地方創生という潮流を**  
西日本の活性化に軸足を置きながら、  
**「地域の連携」によって加速させるプロジェクト**
- 当初から掲げてきたテーマ：  
「**地域間連携による植・食・木育と社会への情報発信基地の構築**」
- キーワード：**「西日本」**・「林産地」・「関係づくり」
- 西日本の中核である「大阪」のテラプロジェクト・まちラボを起点として、九州、中国、四国の林産地を繋ぐ試みからスタートした  
↓
- 林産地が抱える「**地域の創生(=活性化)**」までを視野に入れた  
「一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム」を  
2016年4月に設立、6月より事業を開始

# 大阪富国生命ビル4階 テラプロジェクト・まちラボ

- 「大阪富国生命ビル」  
（大阪府大阪市北区小松原町2番4号）  
→ 西日本の中核たる大阪の中心部
- 4階に展開されている産学連携空間  
「産学連携のショールーム」としての  
テラプロジェクト・まちラボにおける展開
  - A) 異なる地域との連携から生まれる共創
  - B) 地域が競い合いながら地域活性化を考える
  - C) 地域情報の発信
  - D) 地域材促進に関する発信・営業拠点
  - E) 様々な外部からの知恵を集める拠点として活用



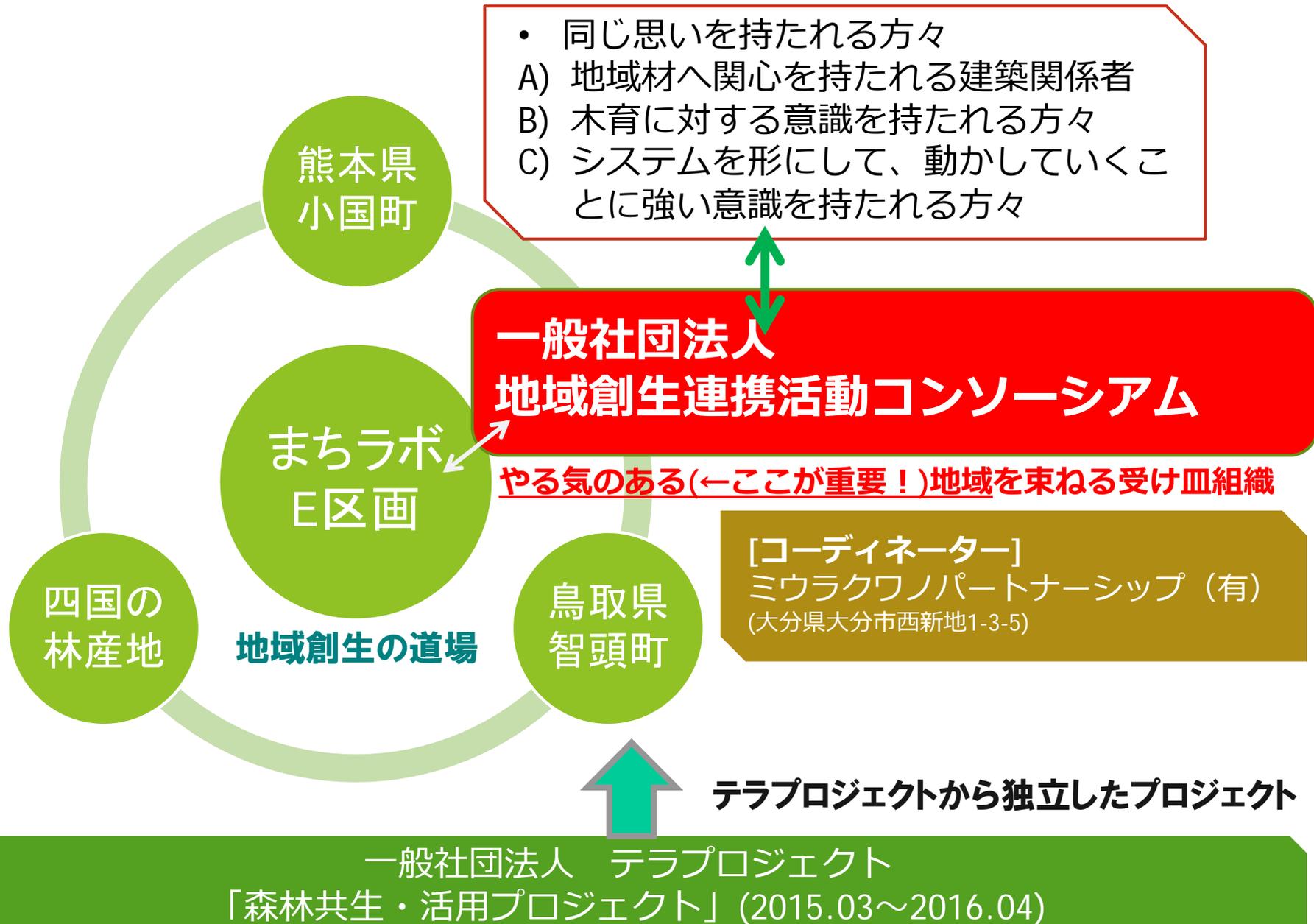
# 組織体制

- **理事長** :小林昭雄(大阪大学名誉教授)
- **事務局長** :加藤久明(大阪大学産業科学研究所特任助教) ※代表理事
- **理事** :時松昭弘(小国町森林組合代表理事組合長)  
寺坂安雄(智頭町森林組合代表理事組合長)
- **監事** :三浦逸朗(ミウラクワノパートナーシップ有限会社代表取締役)
- **組合担当者**:築瀬和彦(小国町森林組合事業課長)  
玉木勝美(智頭町森林組合参事)

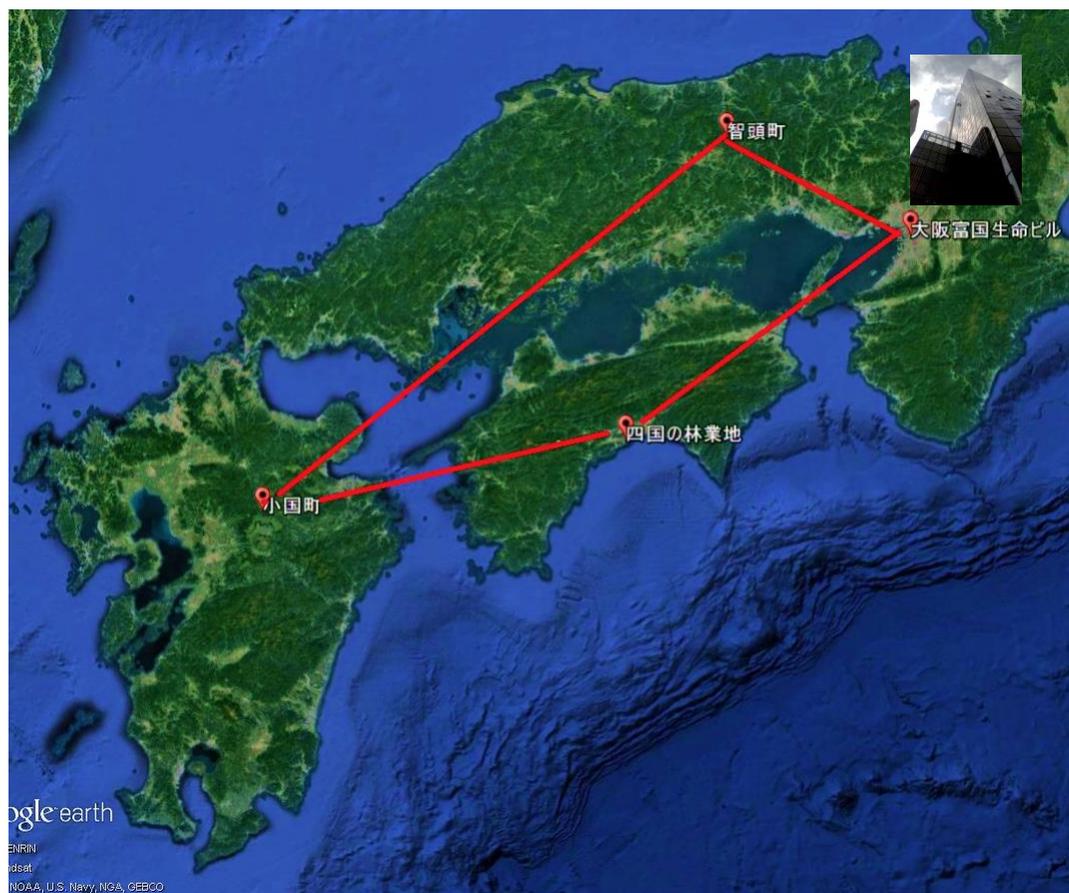
※森林組合が設立時社員となっていることが大きな特徴

- **活動拠点**:大阪富国生命ビル4階 テラプロジェクト・まちラボ E区画  
TEL: 06-6755-4090 (FAX兼用)
- A) **営業時間**は10:30～19:30
- B) **定休日**は木曜日・日曜日  
それ以外は弊社団の会議などの都合に応じて不定休  
(休館日はWebサイトに掲示)

# 本州・九州・四国を繋ぐ地域創生の道場



# 本州－九州－中国－四国を束ねるネットワークづくり



- コンソーシアムが目指す連携は、隣近所の連携ではなく、「江戸と長崎をつなぐ」レベル
- 大阪の中心部に位置する産学連携組織「テラプロジェクト」を軸に、西日本の林業地の雄が連携
- ひとつの地域では変えられないことも、連携と競争の中で実現していく

1. 九州：環境モデル都市だけでなく、森林経営に関するイノベーションを数多く仕掛け続けている熊本県小国町
2. 中国：森林セラピーだけでなく、森林経営を機軸とした町づくりを仕掛ける鳥取県智頭町
3. 四国：イノベティブな森林経営の仕掛けづくりに取り組み、コンソーシアムで協働して下さる林業地を募集中

コンソーシアムが目指すもの

**西日本**を軸に  
**林業地**と**使い手**をつなぐ



マッチング・コーディネート

そのための事始めを、  
小国町と智頭町の連携から  
いずれは日本全国の地域連携へ

# なぜ、テラプロジェクト・まちラボに出てきたのか？

■ なぜ、小国町と智頭町がタッグを組んで大阪に出てきたのか？

■ 西日本の中核である大阪

+

森林資源が豊富な中国、九州の代表的な林産地

(1) 中国: 森林セラピーだけでなく、森林経営を機軸とした町づくりを仕掛ける鳥取県智頭町

(2) 九州: 環境モデル都市だけでなく、森林経営に関するイノベーションを数多く仕掛け続けている熊本県小国町

■ 「歴史ある林産地の雄が、西日本をキーワードにタッグを組み、大阪に出て活動をする」

→ 第3者間で評価され、鍛えられる: わが子を褒めても誰も納得しない。第3者に認められることで、初めてブランドは成立する

→ 林業地と木の使い手たちの新しい関係づくりができる

→ イノベーションの場としての西日本の中核たる梅田の価値UP

# 林業地と使い手をつなぐマッチング・コーディネート

■ マッチング・コーディネート: **西日本**を軸に**林業地**と**使い手**をつなぐ

■ 背景: **コンソーシアム立ち上げの際に見えた諸課題**

- A) 木材の使い手側と供給者である山の側のニーズ／ウォンツの情報流通を改善しなくてはならない
- B) 林業地と使い手が、木材の「適材適所」を共に作りださなくてはならない
- C) 山の側から見えていることを、もっと木材の使い手となる人々にも理解してもらう仕組みづくりが必要
- D) 良い材を使っても、「材が見えない」厳しい時代
- E) 工業製品として売っていくことができる開発も求められる現状



■ 2020年に向けて「木の活用」が簡単に提唱されている

■ だが、現実はその簡単ではないと我々は認識している

■ 材の使い手と林業地のコラボレーションの仕組みを再設計しなくてはならない

# 大阪富国生命ビル まちラボ E区画における活動



# 地域材のショールームとしての梅田の活用



智頭町ブース



小国町ブース

# 智頭町の活動概要

## ● 町役場としての活動展開

1. 町に関する広報資料の設置
2. 企業向け森林セラピー事業の展開  
(CSR活動との連携だけでなく、社員の健康促進のための社会的活動)
3. 木育イベントの実施
4. 観光交流事業の企画  
(初年度は、森林組合主催の智頭材見学ツアーとの連携を予定)
5. 移住定住相談会の開催
6. 森林に関連した新商品開発のための意見交換会

## ● 森林組合としての活動展開

1. 試作商品の展示
2. 地域材展開に必要な営業活動  
→ 各種の商談ならびに地域材への理解を深める活動
3. 地域材販売促進・PR事業の企画

# 小国町の活動概要

## ● 材に関する展示や販売促進

### 1. 集成材を活用した大型非木造：WOOD.ALCに関する事業

- ・中小規模の建設業をターゲットとした普及活動
- ・**西日本WOOD.ALC普及協会**とのコラボレーション

### 2. 杉を使ったアロマに関する事業：

- ・直販システムなども使いながら、アロマの展開・広報を実施

## ◆ イベント活動

### 1. Wood-ALC普及に向けた活動を展開する

- ・Wood-ALC普及のためのセミナーを行う予定

### 2. 小国町から大阪へ商品販売に来る方々との連携

- ・小国から発信をする人たちを応援する仕掛けづくり

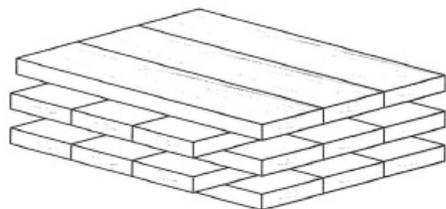


# 「地域材パネル事始め」としてのWOOD.ALC

- WOOD.ALC (外壁用木製集成材; Wood Attain Low Carbon Society)とは？
    - ・構造:厚さ30~45mmのラミナ(間柱)を積層接着し、厚板パネル化した集成材であり、鉄骨造との相性がとても良い  
(現在は45mmラミナの10枚貼りが主流となっており、30mmの15枚から製造可能)
    - ・原料:スギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツ
    - ・耐火・耐力壁性能:1時間準耐火、非耐力壁
  - 品質管理などを「日本WOOD.ALC協会」が全面サポート
  - 西日本における普及については、「WOOD.ALC西日本普及協会」が全面的にバックアップ→各地域で「協議会」を作りながら進めていく
- ↓
- **いきなりCLTに手を出せない林業地も、WOOD.ALCを通じて木質厚板パネルに習熟することができる**

# CLTは魅力的な材料だが...

- 製造設備を新設しなくてはいけないことがネック
- どのように製造設備を減価償却できるのか？現状は厳しい



3、5、7層がCLTの基本構成。上の図のようにひき板を直交方向に積層した材料で、JAS(日本農林規格)での名称は「直交集成板」です。

3×12mのスギCLT。現在、日本国内ではスギを原料としたものを中心にCLTの開発が行われています。



出典:日本CLT協会資料より

## ◆ WOOD.ALCの普及推進に取り組む理由

→ 間柱を接着するため、ラミナの在庫を必要としないこと。鉄骨造との相性の良さ、追加生産設備が最小限、耐火性とデザイン性



地域の社会経済構造に与える負担が最小限であり、機能性が高い

# 町と森林組合のコラボレーションのあり方から考える地域創生

## ■ 地域連携の中で見えてきたこと

### 「町と森林組合のコラボレーションのあり方」

→ 最適なファンディング・システムの構築

→ 町と組合: お互いの実現したいことのすり合わせ

→ 民間事業者とのコラボレーション

## ■ それぞれの地域が実現したいことがあり、そこにそれぞれの地域が持つ個性豊かな材の活用のあり方

→ 「地域材 +  $\alpha$ 」という考え方:  $\alpha$ のカタチはさまざま  
(交流人口の増加、地域材の売り上げアップ...)

## ■ 最終的には、新しい地域の経営のあり方を示すレベルまで成長を遂げる

# 地域材の「2020年問題」

# 地域材の「2020年問題」に立ち向かう

- 2013年10月に施行された「建築物のエネルギー消費性能の向上に関する法律（建築物省エネ法）」
- 現在は大型建築物が中心だが...  
→ 2020年には、300㎡未満の建築も対象となり、「義務化」
- 何が求められているのか？：新しい住宅を建てる時には、
  - (1) 夏に27度、冬に20度を保てるように断熱化をすること
  - (2) 一時消費エネルギー量が一定枠で済むように設計をすること
- 何が狙いなのか？
  - (1) 建物外被の高断熱・気密化  
→ この点が地域材住宅にとって大きなインパクトを持つ
  - (2) 高効率設備利用の誘導

## 地域材にとって何が問題なのか？

- このままでは、「土壁の伝統構法による家は、断熱・気密性能が無いので、改正省エネ法が義務化された暁には、この種の家を建てることは困難になる」
  - 地域材を活用した、美しい木の家を地元の業者さんたちと建て続けていくためには、新しい試みが必要となる
- ↓
- 今後のミッションのひとつ：2020年に新しい木造建築を意識ある地域で共創する
  - 「表し柱」の意味を改めて問う試み

# 2020年に向けた取り組み

- 「地域材住宅」:良い木を将来にわたって育てていく上でも重要な課題
- だが、ひとつの地域で太刀打ちするのは重荷...
- だからこそ、コンソーシアムのような連合体を活用し、独自の地域材住宅の枠組みを構築し、広めていく動きをつくる



- コンソーシアムという場を通じて、森林組合、自治体関係者、工務店や設計士を巻き込んだ地域材活用システムを構築する

# 「第3のパネル」としてのWOOD.ALC

WOOD.ALC西日本普及協会  
(小国町森林組合内)

# 地域材の「2020年問題」に立ち向かう

- 地域創生連携活動コンソーシアム  
→「WOOD.ALC西日本普及協会」の活動・普及拠点としての役割も果たしている
- WOOD.ALCとは？:ALCの木バージョン  
→近年になって注目を浴びているCLTやLVLと並ぶ「第3のパネル」と呼ばれているが、認知度はいまひとつ

木が持つ軽さ→躯体重量の軽減

「外に向けて現しにする」という  
カーテンウォールとしての特徴



# 地域材の「2020年問題」に立ち向かう

## (1) CLT (Cross Laminated Timber)

- ・構造:ひき板(ラミナ)を並べた層を、それぞれの層が互いに直行するように積層接着している。これにより、高強度の大判パネルを作ることができる
- ・原料:スギ、ヒノキ、カラマツ
- ・耐火・耐力壁性能:準耐火構造(3階まで)、1時間耐火構造(4階まで)、2時間耐火構造(5階以上)、耐力壁として使用可能

## (2) LVL (単板積層材; Laminated Veneer Lumber)

- ・構造:厚さ3mmの薄いラミナを積層している。材料としての歴史は古く、第二次世界大戦中の飛行機の木製部材などをルーツとしており、戦後も「平行合板」という名前で生産されてきた歴史を持っている。
- ※LVLと集成材の大きな違いは、積層させる板の厚みにあります。前者では厚さ数ミリ単位、後者では1センチ以上の厚みの木材を積層します
- ・原料:スギ、アカマツ、カラマツ
- ・耐火・耐力壁性能:1時間準耐火耐力壁、1時間準耐火非耐力壁、30分準耐火非耐力壁

## **(3) WOOD.ALC (外壁用木製集成材; Wood Attain Low Carbon Society)**

- ・構造:厚さ30~45mmのラミナ(間柱)を積層接着し、厚板パネル化した集成材であり、鉄骨造との相性がとても良い(現在は45mmラミナの10枚貼りが主流となっており、30mmの15枚から製造可能)
- ・原料:スギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツ
- ・耐火・耐力壁性能:1時間準耐火非耐力壁

# 木質厚板パネルをめぐる現状

## ■ 圧倒的な注目を集める”CLT”

→ 林野庁なども大きく後押しをしている現状

## ■ 「木質材料を使った大型建築はCLTに限る」といった風潮すらある

→ 工学的な材料特性や大判パネルの活用と言った点で、CLTは木質材料を用いた建築に大きなイノベーションを起こしていることは事実。その意味において、純粹に材料として見ればその可能性は今後も大きい



## ■ だが、地域創生連携活動コンソーシアムは、地方創生を冷静に見据えて”WOOD.ALC”の普及を推進する

# 我々がWOOD.ALCを推進する理由

- **既存の製造設備を活用できる！**
  - WOOD.ALCはCLTと異なり、既存の30mm厚のJAS規格の間柱を生産する設備を応用して作ることができる(生産コストを抑制しながらなお、付加価値の高い木質材料を創出するポテンシャル)
  
- **既存の非木造工法との共存が容易**
  - 「**鉄骨造＋WOOD.ALCによる外壁木質化**」
    - 構造は既存の鉄骨造に任せながら、面積の大きい外壁の木質化を担当する(構造という面でも、非木造と対立構造を生まない)。300坪の集合住宅で最低100m<sup>3</sup>以上の木材を必要とする

# WOOD.ALC西日本普及協会

## ■ 目的

「(一社)日本WOOD.ALC協会が国産木材を利用して開発した”WOOD.ALC”(準耐火材)の製造と建築工法を西日本を中心に普及させる」

## ■ 事務局

〒869-2501 熊本県阿蘇郡小国町宮原1802-1

熊本県小国町森林組合内 WOOD.ALC西日本普及協会事務局

TEL:0967-46-2411

E-mail: yanase@ogunisugi.com

■ Facebookページ: <https://www.facebook.com/walc.west/>